

# 来日外国人のみた日露戦争

——ラフカディオ・ハーンと戦時下の日本——

島根女子短期大学教授

小泉 凡

## はじめに

本稿では、明治二十三年から三十七年まで十四年間日本に滞在し、複眼的視野で日本文化を観察したギリシヤ系アイルランド人（当時は英国籍）ラフカディオ・ハーン（一八五〇—一九〇四年）の目に映じた、日露戦争とそれに関連した諸事情について光をあて、当時の来日外国人の日本観の一端を探ることを目的とする。

昨年はハーン没後百年にあたり、現代の文脈からハーン作品・思想・行動が再評価される多彩な催しが各地で行われた。そして今年が日露戦争終結から百年目を迎えるということは、ハーンの寿命は日露戦争の終結を見届けることができなかったことを意味する。しかし、最晩年までジャーナリスト、民俗学者、作家として、戦時下の日本を観察し、みずから日本に帰化し日本人の家族をもつ一人の人間として生き、日本の将来を考えることを怠らなかった。そのようなハーンの日露戦争前後の作品、行動、交友などを資料としながら論じていきたい。

なお、ハーンは明治二十九年二月に帰化手続きを完了し、「小泉八雲」と改名したが、常に作品を英語でアメリカの出版社から発表し、Lafcadio Hearn の名を終生使用したことを鑑みて、本稿では「ハーン」で統一することにした。

## 一、大津事件と畠山勇子

ハーンが島根県尋常中学校の英語教師として松江に居住していた明治二十四年五月、シベリア鉄道起工式の途次に日本に立ち寄ったロシア皇太子（後のニコライ二世）を警護中の巡查津田三蔵が日本侵略のための来日と信じて襲撃・負傷させた大津事件は余りにも有名である。その際、ニコライは額に一生残る傷を受け、以後日本および日本人に対して激しい憎悪を持ち続けたといわれる。<sup>(1)</sup>そこからも、大津事件が日露開戦のひとつの動機付けとなった出来事だったことが推察される。

ハーンの親友で同尋常中学校の教頭西田千太郎の日記によれば、明治二十四年五月十六日に「ヘルン氏方ニ岡本金氏ノ依頼ニヨリ、ヘルン氏ニ乞ウテ魯国皇帝ヘノ皇太子遭難見舞ノ電報文ヲ仏語ニテ認メテ貰ヒタリ」とある。<sup>(2)</sup>つまり、当時島根県の県紙である山陰新聞（後の山陰中央新報）主筆の岡本金太郎が、新聞社名で露国皇帝に見舞い文を送りたいのでハーンにフランス語で電報文を書いて欲しいと西田千太郎を介して依頼したのである。実際、ハーンはまず英語で見舞電報の下書きを書いた。これは島根大学図書館に現存し、すでに梶谷泰之氏によって紹介されているが、もう一度訳文を示しておく。

サンクトペテルブルグ 日本全権公使閣下

大津においてまことに痛ましき御奇禍に対し、日本最古の出雲の国の全人民はひたすら深く、悲嘆を披瀝申し上げている旨、露国皇帝陛下に御伝奉を乞う。

山陰新聞社<sup>(3)</sup>

この電報文作成という行為は、ハーンにとって地方在住の一人の国際通の学識者としての責任を果たしたという行

動の範囲を逸脱するものではなかったかもしれない。しかし、事件後、京都で畠山勇子という女性が、津田巡查の非行を償い陛下の心を慰めるために自害したという事件、またその背景にある社会の動き、民衆の受けとめ方に大きな関心を示した。とくに政府の統制によるものではなく、「天子様のご心配」という言葉の広まりによって町が肅然とするような日本社会の現実にはハーンを驚かせた。そしてハーンは「勇子——ある美しい思い出——」(Yuko: A Reminiscence)という短編作品を書き『東の国から』(Out of the East, 1895)に収録し、さらに明治二十八年の京都旅行の際には勇子の墓を末慶寺に訪ね、その霊を弔っている。ハーンは、勇子の死は「仏教的な厭離穢土といった考えで心を閉ざしてしまつたのではない。勇子はもう日本の神々に身を委ねて<sup>(4)</sup>」とその心中を解釈し、ここに神道が日本の民衆文化に与えた影響を見ようとしていることがわかる。事件や戦争そのものについての考察より、それを民衆がどのように受容し、その背景にはどのように伝統文化が影響を与えたかについてより関心を抱くのがハーンの異文化観察の態度だといえよう。

## 二、日清戦争後の日本とロシア

しかし、一方でハーンは生粋のジャーナリストでもあつた。来日以前、アメリカのシンシナティとニューオリンズではのべ十三年余りにわたつて四つの新聞社の記者をつとめ、日本においても明治二十七年から二十八年にかけて神戸クロニクル社の記者としておもに論説記事を担当していた。したがつて、最新の世界情勢にも決して鈍感ではなかつた。もちろん、ハーンの神戸在住時にはまだ日露戦争は始まつていないが、神戸クロニクル紙の記事の中に、日本やロシア、周辺諸国の将来にも言及した興味深い文章を残している。当時は日清戦争の戦勝ムードの中で自負心を高める日本に対し、朝鮮経営の点については次のような不安を示している。

日本の勝利は朝鮮問題をまったく解決していない。しかも、この問題には依然として恐るべきところがある。偉大な軍人になることと偉大な行政官になることは、まったく別の事柄である。(中略)もし日本が朝鮮を統治しようとすれば、ロシアが文句をつけることはまず間違いないだろう。そうすれば他の列強も面倒な事態に巻き込まれるだろう。<sup>(6)</sup>

このように日本の朝鮮統治に関する行政能力を疑問視した上で、次のような提言を行っている。

軍事保護領に代わるもうひとつの方法は、関係列強の共同の保護と一致した圧力のもとで、独立国として朝鮮を可能な限り改革することである。その場合、日本はその利害関係から正当とされる行政の主要部分を任されるべきであり、ロシアの影響力のいかなる優勢も、徹底的に警戒しなければならぬ。換言すれば、日本は西洋諸国の道徳的な援助によって、朝鮮を改革することができると思う。<sup>(7)</sup>

ハーンは基本的には親日的に日本の将来を考え、その結果、危惧し、警告を発することもあった。日清戦争終結直後に書かれた「戦後」にはこのように日本の強すぎる自負心について戒めるような言及もある。

日本帝国の軍事的復活——それが新日本の眞の誕生なのだ——は日清戦争の勝利とともに始つた。戦争は終り、将来は曇つて暗いけれども、それでも大きな希望を約束しているかにみえる。それに今度の戦争よりもさらに雄志をのぼして、もつとずつと永続する成果をあげるために、どれほどの難関が前途に横たわろうとも、日本はもはや危惧したり逡巡したりすることはないに違いない。しかし日本にとって将来の危険はまさにこの途方もなく大きな自信のなかにあるともいえよう。<sup>(8)</sup>

その一方で、日本在住者としてまたヨーロッパに生まれ育つた英国籍の人間としてロシアの侵略に対して強い警戒心を抱いていた。

列強の中で、戦争によって失うものが少ないのはロシアだけである。この大国の成長の歴史において、戦争は

正常な状態だった。全ヨーロッパはロシアに対して用心している。ロシアの著しい貧困が力なのであり、その力は永遠の脅威である。それは年々大きくなっていく脅威でもある。ドイツの四倍の速さで人口が増え、領土が地球上の六分の一を占め、純粹な侵略活動のための無制限な資源があり、将来は総計六百万の騎兵隊に拡大する軍事組織を持ち、過去の歴史において世界を三たび席卷したアジアの草原の遊牧民を、すべて兵役につかせることができる。<sup>(9)</sup>

ロシアの東方進出への懸念は、ハーンの主観というよりは、多くの西洋諸国の一般の見解だと解釈すべきだろう。また、ハーンが「貧困の力の脅威」という、ともすると揶揄的に聞こえる表現を用いてロシア人気質を示唆したのは、岡崎久彦氏が著書『小村寿太郎とその時代』の中で言及した次のようなロシア人気質についての見解と通ずるものがある。

田舎の人は面と向つていやがることはいわない。つい相手の耳に逆らわないことをいってしまう。といって本当の損得はよく知っていて、それを譲る気などは毛頭ない。そして紳士間の約束だなどという抽象的な概念のために、実利を犠牲にするなど考えもしない。取れるものはあくまでも取る。だから、言うこととすることがウラハラになるのである。先に引用したゴルチャコフの言葉もそのように理解できる。<sup>(10)</sup>

これは外務省でロシアに関して深い見識のある法眼晋作氏が自分自身の生い立ちと重ね合わせて語ったロシア人観を受けての発言であるが、当時のロシアという国の特性を後進性・周縁性といった点に注目した、直感的ではあるが説得力に富む巧みな表現だと思われる。

### 三、日露戦時下の民俗

そして日露戦争が始まると、ハーンは戦時下の民衆の生活の諸相を観察し、「日本だより」(A Letter from Japan)と題してボストンの『大西洋月刊誌』(Atlantic Monthly)に寄稿し、同誌の一九〇四(明治三十七)年十一月号に掲載された。その中で日本の開戦についてまず次のように肯定的なコメントを寄せている。

日本は大胆不敵にも、東西両文明を同時に脅かすほどの力をそなえた一大帝国に対して、——もしこれを阻止しなかったら、相手はかならず近き将来においてスカンディナヴィアに侵入し、さらに中国をも併呑するにきまつている、中世以来の一大強国に対して、敢然、干戈を挑んだのであった。もちろんこの戦争は、国内のいつさの産業文化にとつての一つの大きな非常時であり、——おそらく日本にとつては、国民生活の一大危機であることは言うまでもない。<sup>(1)</sup>

このように述べたハーンは、日本の艦隊や陸軍の戦果について多くの外国のメディアが報道している一方で、戦時下の日本の民衆の生活に関してほとんど知られていないことに疑問を覚え、みずからが行った詳細な観察を提示したのであった。以下、ハーンの観察した日露戦時下の世相を箇条書きにまとめてみることにする。

- ・ 平静と笑顔 国民は戦前と同様に日々の生業に従事し、笑顔をみせている。
- ・ 写真屋の隆盛 出征兵士が自分の写真を家族に残して行きたがるのと、戦地へ家族の写真を持って行きたいという事情から写真屋が空前の繁盛となっている。
- ・ 蔭膳の形態の変化 小さな台に本人の写真が飾られるようになった。
- ・ 展示会題材の変化 自宅近く(西大久保)のツツジ園の「生き人形展」(生きている花や葉で精巧につくった人形)

の題材が、戦争の場面をあらわしたものになった。

・戦争画の販売 交戦直後から石版刷りの多数の戦争画が出版された。

・戦争グッズの販売 櫛、カンザシ、襟止め、扇子、ブローチ、名刺入れ、財布、パン、菓子、行灯、提灯、反物、長襦袢、羽織の袖口・手ぬぐい、フクサ、友禅染の産着などに日露戦争の絵、日本と英国の旗（日英同盟を祝したもの）などが描かれるようになった。

・戦争玩具の販売 両国の軍艦が描かれたカルタ、軍艦模型、ぜんまい仕掛けの大型軍艦玩具、海戦遊びの砂の箱、子供用海軍帽子、土製・錫製の砲兵人形などが販売される。

・戦争遊びの流行 木片を使った手作りの軍艦と盥では旅順口攻撃ごっこがさかに行われる。

・床庭の題材の変化 旅順口の模型、竜宮の乙女がマカロフ提督と広瀬中佐を見送る「海底之一見」など新型模様が登場する。

・広瀬中佐信仰 広瀬中佐の肖像が多くのお家庭に飾られる。肖像つきグッズ（カフスポタン、杯など）、「軍神広瀬中佐」の文字、全国の小学校で広瀬中佐の軍歌が歌われる。

「日本だより」という作品は、こういった戦時下の世相を丁寧に取り上げて解説を付したものであるが、ハーンの興味の対象が一般の外国人ジャーナリトとは異なり、民俗学者的態度に共通するものがみられる。来日以前から民間伝承や民衆文化に限りなく魅了されてきたハーンの傾向は晩年にさしかかっても基本的に変わっていないことがわかる。

#### 四、藤崎八三郎との交友

「日本だより」の中でハーンは、出征する兵士たちが、泥でこしらえたロシア兵の首を子どもたちに配り、帰還の

際には本物の首を持ち帰ると、冗談半分の約束を添えたと同想している。現代の感覚ではともするとグロテスクな印象を禁じ得ないが、ハーンはこれについても決して否定的に受け止めることはしなかった。明治三十七年九月二十六日夕方、この体験を松江時代の教え子で、明治三十年八月には一緒に富士登山も行った愛弟子の藤崎八三郎に認めている。当時、藤崎は日露戦争に従軍し、満州軍司令部に配属されていた陸軍工兵大尉だった。はからずも、この手紙を書き上げて数時間後にハーンは心臓発作のために異界に旅立った。この絶筆となった書簡は、その後藤崎家に保管されていたが、第二次世界大戦中の戦災で焼失してしまった。しかし、前もって木下順二氏が写真をとっていてその原版が残ったため、現在も複写が松江市の小泉八雲記念館と熊本市の小泉八雲旧居に展示されている。<sup>(13)</sup>

こちらに、一寸の間、連隊が駐屯していました。そして引き払って出征する時、近所の子供たちにおもちゃをくれました。そして一人の兵士はこういきました。——「凱旋する時は本物の首をおみやげにもって帰ってやるよ——と。時が時だし、贈り主が贈り主なので、家ではみんなこのユーモアたっぷりの贈り物を大いに賞賛しました。<sup>(13)</sup>

ロシア兵の首人形を歓迎したというのである。それはハーンのような真意からでた言葉なのだろうか。

ハーンの死後、藤崎は明治三十七年十二月十八日付小泉セツ（ハーンの妻、宛て軍事郵便でハーン没後の遺族の様子を氣遣った後、「吾々は唯勇戦奮闘君国に尽くすのみに御座候」と述べ、さらに長男の英雄（十一歳）には「あなたのご親切に感謝します。あなたのとでも素晴らしい英語のお手紙を読むことができて嬉しいです」（原文は英語、次男の巖（七歳）にも「巖サン御手紙有難ウ、私ハキツトイクサニ勝テ帰りマス、待ツテ居ラッシャイ」と認めている。ハーンは以前から息子たちと藤崎のこのような心あたたまる遣り取りを見守っていたこともあり、藤崎の立場も考えた上で、日本の世相に非常に共感的な書き方をしたのかもしれない。また、自分自身、明治二十九年二月に一連の帰化手続きが完了し、英国籍ラフカディオ・ハーンから日本人小泉八雲となり、日本人の家族をもつより日本的な環境が出

来上がっていたことも、日本への強い愛着を促すことになったのだろう。絶筆の後半にはロシアについて次のように言及されている。

世界の商業列強の国々は露国の侵略には迷惑を被っていますし、結局露国皇帝の大砲より産業の力がはるかに強いのです。少なくとも、いやしくも諸外国の同情は日本側に集まります。とにかく、露国が満州を失うのは必然であると考えます。<sup>(14)</sup>

ここにもロシアに対するハーンの不信感の底流が示されており、それは先に引いた「ヨーロッパの将来」にみえるロシア観の延長上にあることがわかる。ハーンは遼陽の大会戦に触れ、そのような大会戦の現場へ自分の手紙が届けられることを驚き、「遅くとも夏には君に会えると期待しています」と書いている。もちろん、「君に会える」ということは終戦を意味するので、ハーンの子想はその意味で的中した。ここにも、ジャーナリストとして世界情勢に通じ、日本に親近感を覚えつつも大局的に時勢をとらえていたことが垣間見える。しかし、前述したように自らの寿命が藤崎との再会を許さなかった。

## 五、小村寿太郎とハーン

日露戦争当時、桂内閣で外務大臣をつとめていた小村寿太郎（一八五三—一九二一年）は、ハーンの著作に関心を示した人物である。小村の書生であった榎本卯平によれば、小村「先生自身もヘルンは日本に住める英文家中第一流の健筆家だと関心しておられた<sup>(15)</sup>」という。ハーンと小村の間には藤崎大尉のような直接の交友はなかったが、小泉家にはこんなエピソードが残っている。小村寿太郎から小泉セツに、ハーンの著書を旅の船上で読みたいので入手したいという申し出があり、ハーン没後であったため、長男一雄の名で代表的な著書二冊『知られざる日本の面影

(*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 1894) 『日本——一つの試論—— (*Japan, An Attempt at Interpretation*, 1904)』を送付した  
というのである。それに対して丁寧な礼状が送付され、その書簡は現在、松江市の小泉八雲記念館に展示・保存され  
ている。以下に全文を引用する。

拜啓 陳者御亡父ノ御遺著 Japan an Interpretation 及御亡父ガ本邦へ御渡来後初メテ Glimpses of Unfamiliar  
Japan ト題スル御著書御送付被下忝ク拝受致候 右ハ篤ト拝見ノ上御亡父ノ一記念トシテ永ク保存愛読可致此  
段不取敢御礼申述度候 早々敬具 明治三十八年五月十六日 外務大臣男爵小村寿太郎

小泉一雄殿<sup>(16)</sup>

今年の五月中旬、折しも日露戦争・ポーツマス条約締結百周年記念国際シンポジウムが開催されていた日南市の小  
村寿太郎記念館を訪問し、水渕昶太郎館長から小村の書簡につて種々ご教示を受けた。それによれば、小村の自筆書  
簡は極めて少なく、多くは口述筆記による祐筆だという。この書簡についてもその可能性が高いが、比較の前提とな  
る小村の自筆自体が極めて少ないこともあり、祐筆か自筆かの判定は今のところつけ難い。いずれにしても、この礼  
状から、小村外相の読書家としての側面と外交官として西洋との比較のもとに日本を位置付けようとする客観的・複  
眼的視野を感じ取ることができる。

小村の読書好きは有名で、暇をみつけては読書にふけた。とくに、それも欧米人による清国関係のものが多かつ  
た<sup>(17)</sup>という。また、ハーンが「日本への冬の旅」(*A Winter Journey to Japan*, 1890)で、明治二十三年四月四日、アピシ  
ニア号の甲板からみた富士山について、最初それに気づかず、視線を上げると一切の形あるものを超えたところに雪  
をいただいたこの上なく優美な山容がみられたと記しているが、小村はこれを読んで「面白い文章だ」と褒めていた<sup>(18)</sup>  
という。ハーンの遺族が贈呈した二冊についても、ポーツマスへ行く前あるいは途次の船上で熟読したもの<sup>(19)</sup>と推察さ  
れる。小村の書簡の日付、五月十六日は、日本海海戦の直前で緊張の高まる時期であるが、すでにアメリカ大統領の

ローズベルトが講和の仲介をすべく行動を開始していた時期でもあり、小村も外交官としてより相対的な日本理解の必要を感じ、あるいは祖先崇拜など日本文化の真髓を親日的に鋭いまなざしで説いたハーンの日本論を読んで自身の行動に自信を持ちたいという気持ちから、より深い日本文化理解の一助として元來好んでいたハーン作品をあらためて精読しようと思ひ立つたのではないか。もし小泉家に伝わる口伝が眞実だとすれば、「船上で」というのは必然的に「ポーツマスへの船上」を意味し、小村はこの手紙を出した五月中旬にすでにどこかで講和会議が開かれれば、自分が全權として赴かざるを得ないという覚悟が心中にあり、船上での読書にハーンを選らんだという推測も成り立つ。

小村は最晩年、神奈川県葉山の一色村で療養した際、しばしば鉄アレイと読書を楽しんだというが、偶然にも「読書」と「鉄アレイ」はハーンの日課であり趣味でもあつた。そして、小村が約百五十六センチという小柄な体軀で、淡泊と清廉、正直で強硬な意思を持ち、抜群の記憶力の持ち主であつたことが知られているが、ハーンもまたそれらの点においてまったく同様であつた。

## おわりに

小村が小泉一雄宛書簡を認めた二週間後、日本海海戦における日本勝利のニュースは東郷平八郎の名と共に世界を駆け巡つた。欧米のマスコミは概して日本に好意的で、ロシアの民衆に同情の念を表しつつも、統治者に対しては「傲慢怠惰」(五月二十九日付け『ワシントンポスト』)、万策つきた今、さらに戦争を続ければ、ロシアの地位は東洋ばかりでなくヨーロッパでも失墜する(五月三十日付け『ザ・タイムズ』)などと厳しく批判した。<sup>(21)</sup> いうまでもなくその後、日本の政治的軍事的強国としての地位は向上したが、とくにドイツ皇帝などから以前にも増して黄禍論が主張されるよ

うになった。

日露戦争終結まで見届けられなかったハーンだが、もしあと八ヶ月寿命があれば、戦争の結果についてはこういった欧米のマスコミと基本的に同様のコメントを残したものと想像される。しかし、黄禍論については、明治二十七年に熊本での講演「極東の将来」で「私は将来は極西のためではなく極東のためであると信じている」と述べたように、共感することはなかったであろう。

ハーンの個性は、戦時下の民衆の風俗、戦争を契機とした写真の隆盛による伝承文化の変化など、戦時下においても民衆へのまなざしを持ち続けたことだといえる。そして、たとえ「クロバトキンが、日本侵入という軽率なおどかしを実行できるとしたら、おそらく日本の国民は、そのひとりひとりが敢然と立ち上がるだろう。さもなければ、どんな大きな災厄を思い知らされても、かれらはかならず雄々しく耐え忍んでいくだろう」と最悪のシナリオを予想しつつも日本がそれを乗り越えてゆくと展望している。その理由として地震、津波、洪水などの自然災害が頻発する日本の風土によって培われた日本人の忍耐力や不屈の精神が戦争への勇気を鼓舞しているからだと考えている。

ハーンは自然災害に関心を示し、津波という言葉をはじめ英語のテキストで使用した作家でもあったが、風土論と関連付けて戦時下の日本人の行動を予測したことも、この作家のひとつの個性だといえよう。

## 註

(1) 岡崎久彦『小村寿太郎とその時代』(二〇〇三年、PHP研究所) 一七二頁。

(2) 『西田千太郎日記』(一九七六年、島根郷土資料刊行会) 一〇九頁。なお、引用文冒頭にある「ヘルン氏」とは「ハーン」のことで、島根県とハーンとの間に交わされた条約書に「ラフカチオ・ヘルン」と記されたことから、その後、松江では今日まで「ヘルン」と呼び習わされている。

(3) 梶谷泰之『へるん先生生活記』(一九九八年、恒文社) 九八―九九頁。なお、この見舞文は、『西田千太郎日記』に「然

- レドモ都合ニヨリ發送セズトノコト」とあるように、実際には發送されなかった。
- (4) 遠田勝訳「勇子」『明治日本の面影』所収（講談社学術文庫、一九九〇年）二八九頁。
- (5) その点については、遠田勝「小泉八雲と武士の娘たち」『國文学——解釈と教材の研究——』第四三卷八号（一九九八年）や『小泉八雲事典』の同氏による「勇子——ある美しい思い出——」の項目に説得力のある考察がみられる。
- (6) 佐藤和夫訳「朝鮮の謎」『ラフカディオ・ハーン著作集』第五卷（一九八八年、恒文社）五五二頁。
- (7) 前掲書 五五三頁。
- (8) 平川祐弘訳「戦後に」『日本の心』（講談社学術文庫、一九九〇年）一三四頁。
- (9) 佐藤和夫訳「ヨーロッパの将来」『ラフカディオ・ハーン著作集』第五卷（一九八八年、恒文社）四六四頁。
- (10) 岡崎久彦「小村寿太郎とその時代」(二〇〇三年、PHP研究所) 一五二頁。ハーンは明治二十七年に熊本の五高で行った講演で「日本の貧困は日本の力になっていくという固い信念をあえて表明しておきたい」（「極東の将来」）と述べており、ロシアに対して用いた表現は日本にもあてはめられると考えていた。
- (11) 平井呈一訳「日本だより」『怪談・骨董』（一九七五年、恒文社）四六八―四六九頁。
- (12) この事情については、藤崎夫人のヲトキ氏が、「小泉八雲ご夫妻と私——覚えがき（二）」（『随筆くまもと』第八十八号、一九六三年）に詳述している。また、ハーン絶筆の翻訳は『小泉八雲全集』第十二卷（一九二七年）にも掲載されている。
- (13) 引用文は小泉八雲記念館に展示中の梶谷泰之訳によるものである。
- (14) 同右。
- (15) 柘本卯平「自然の人 小村寿太郎」（一九一四年、洛陽堂）四三四―四三五頁。なお、本書は小村寿太郎の伝記の底本とされるものである。
- (16) 引用文は旧字体については新字に改めた。解説に際し、大社町史編集委員会の加納善子氏にご教示いただいたことを記し、謝意を表す。なお、小村外相から小泉セツへ最初にどのような形でアプローチがあったのかは不明であり、書簡等も小泉家には残されていない。文中に示した小泉家に伝わるエピソードとは、セツが長男一雄へ、一雄が一人息子の時へ、さらに時が凡（筆者）へと口伝したものである。
- (17) 木村勝美「人間小村寿太郎」（一九九五年、光人社）一七頁。

- (18) 栞本卯平『自然の人 小村寿太郎』(一九一四年、洛陽堂) 四三六頁。
- (19) 原資料の筆跡から、日付けに関して「七月十六日」または「ながつき十六日」とも読める。しかし、小村は七月八日に横浜を離れポーツマスに向かつており、帰国は十月十六日であるので、「五月」と読んだ。
- (20) 木村勝美『人間小村寿太郎』(一九九五年、光人社) 二七八頁。
- (21) 野村實『日本海海戦』(一九九九年、講談社現代新書) 一九一―一九二頁。The Military Correspondent of The Times, *The War in the Far East 1904-1905* (London, John Murray, 1905) にも同じ趣旨の記事が収録されている。
- (22) ハーンの講演、「極東の将来」。この講演で、ハーンは世界の将来は経済問題により強く左右されるようになるので、日本もシンプルライフを旨とし、西洋の物質的豊かさを求めるべきではないと説いている。『ラフカディオ・ハーン再考』(一九九三年、恒文社) 二九六頁。中島最吉訳。
- (23) 平井呈一訳「日本だより」『怪談・骨董』(一九七五年、恒文社) 四八九頁。ハーンの日本人の国民性と風土との因果関係についての指摘は、一八九四年十月二十七日付けで神戸クロニクル紙に掲載された「地震と国民性」(Earthquakes and National Character) に詳しく述べられている。